
3年目の正直

如何家 サイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3年目の正直

【Nコード】

N1322S

【作者名】

如何家 サイト

【あらすじ】

エイプリルフル企画。エイプリルフルに3年前の卒業式以来の女の子に会ってバカ言い合うだけ。ただそれだけの話。

「ウソのようでホントの話」

「それってエイプリルフールに言ったらウソになんね？」

「じゃ、ウソの話」

「信じらんねえなあ」

今日はウソを吐いてもオーケーって日。

そう、エイプリルフール。

だから俺もツイッターやメールで友人にウソを吐きまくってた。そんなところで女友達のミミからお呼びがかかる。

コンビニまで来いってさ。

「誰も居ねえー」

コンビニの駐車場に着いて早々に気付く。

これはウソだったって。

ヤケになってオーバーリアクションしていた。幸い駐車場には一台も停まってない。

リアクションの余韻に浸っていると、懐に忍ばせてある携帯が鳴る。

『ウソでしたー』

電話口からミミの笑い声が聞こえる。

小、中と同じクラスで幼馴染だけとお互い違う高校に上がってからはロクに話もせず、中学を卒業してから3年が経つ。

「フーザーケーサーナー」

それでも俺はあの頃に戻ったように自然とツッコミができていた。高校生のノリというか、学校ではキャラみたいなもの演技してい

たために素で話すという感覚が薄れていたのかも知れない。

ミミの明るい声である頃に戻るスイッチが入ったのだろう。

『今、そっち行くヨ』

唐突に電話を切って、コンビニの裏手からヒョイッと顔を出してくる。

さては隠れていたな。

「おう、おひさー」

本当に久しぶりで二人して照れていた。

4月と言えどもまだまだ寒さは続き、ある程度の暖かいファッションをしていて、大人っぽい印象を受ける。

変わらないのはやっぱり馬鹿そうな顔とイタズラ好きっ子の笑みを浮かべるところだ。

「あー！ 今、変な想像したでしょ？」

「ずっと前から思ってたことだわい」

「言ってみなわい」

「ひんにゆう」

回し蹴りだった。

「ごめん。需要あるよ」

「フオローになってないし」

中学時代の俺は頻繁にスカートめくりをしていた男子だったし、ミミは頻繁にスカートめくられる女子だった。

スカートめくりの仲だ。

スカートの中、パンツの中への興味を持ったのも中学時代だった。

「なんでスカート穿かないの？」

「なんでそんなこと訊くの？」

「そういえば私服でスカート穿いてるの見たことないなあって」

「ジーンズ少女は嫌いですかそうですか」

「いや、いやいや！おれっち、ジーンズ少女大好きっ子ツス！ツス

！」

「もう私、18歳だよ。もう少女じゃないから残念だったねー」

しばし静寂が流れ、どちらともなく「ぷっ」と吹き出してしまった。

あとはもう爆笑だ。

ひとしきり笑い合った後、目尻に浮かぶ笑い涙を払ってからミミが問う。

「なんで久しぶりに会ったのに、こんな話題なの？」

「そもそも中学ン時からこんな話ばっかじゃなかった？」

「『ばっか』じゃなかったと思うんだけどナア」

「あ、『ばっか』って言えば俺のこと四月馬鹿にしたろ！」

「あちゃー、……バレた？」

もちろんコンビニに呼び出したことで、バレるもなにもないけれど。

俺は自転車に腰を落ち着けているのが少し辛くなって、ミミの座っているベンチに移動する。同じベンチに腰掛けるのは気恥ずかしかったが、テンションも高まってきたので座るのも躊躇いなく行えた。

「なんか、飲もっかな」

俺が座って数秒でミミはスツと立ち上がる。

ちよつとだけ俺は傷付く。

「のどかわいたし」

「そうだね」

軽い感じに返して、俺も立ち上がる。緊張感が心に現れ始めたけど、別にどうってことはない。

先日の地震で休業していたコンビニも再開し、品揃えは悪くとも店としての体裁は整えていた。自動ドアだって動く。

俺たちは店内へ移動する。

「麦茶と水しかない！」

「俺ンちの自販機はマウンテンデューとか売ってたけど」

「店内で他の店の話題出すのはダメなんだってバイトで学んだんだけどー？」

「自販機もアウトだったのかけどー……くっ」

「無理して合わせなくていいよ」

見苦しいところをお見せしつつ、俺もミミも麦茶を選んだ。

それから店内を軽く物色して目ぼしい物もなく、レジで会計を済ませる。店員は知り合いではないが、このコンビニではレギュラーな店員で、俺とミミの関係を計っていたようだった。確かに過去にそういう関係になるうとしたことはあったが今ではただの友達だ。

店員に会釈して、ミミを追いかけるように店を出る。

さつきとは違い、ベンチの奥にミミは座っていた。

俺は緊張感を思い出しながら手前に座る。

「はいコレ」

ミミの手から板ガムを格好つけた感じに差し出される。

「板ガム？」

「おいしいじゃん」

「これから麦茶飲むの？」

「そうだよ。ガムを食べて、スーサーしたまま麦茶を飲む。オツですなー」

「オツじゃねえし」

「なら、やってみなよ」

端っこをつまんでミミから板ガムを受け取る。

隣ではガムを口の中に放り込んでいた。片目でチラッと「食べよ」というサインを送ってくる。

銀紙を開いて板ガムを食べる。かなりスーサーする種類で、眠気覚ましに効果テキメンに違いない。

「では、そろそろ儀を始めるかのう」

重々しい口調で語りながら、麦茶のキャップを開ける。俺もそれに続く。

飲み口を形のいい唇に乗せ、ボトルを傾けると、クピクピと音が

聞こえてくる。口に流し込んだまま少しの時間だけ含んで、白く細い喉へゴクリと飲み込む。飲み口を離して、麦茶で潤った口を開けて仕事帰りの一杯を飲んだオッサンと同じノリで「ぷはあっ」と一息吐いた。

「ほら、んまい！……どしたの」

「見蕩れてた」

「ちよっ？ ま、真顔で言うなよ。ほら、早く飲め飲め」

麦茶をグイグイと勧めてくる。顔を赤らめて酔っ払いみたいだ。言われるがままに俺も麦茶を口に含む。その瞬間に口中いっぱい広がる清涼感。

さっぱりした感じが気持ちいい。同時にミミの思い通りで気に入らない。

「スースーするでしょ」

「スースーするわ。だが、マズイ」

「えーっ！ おいしいのに」

しょぼーんって顔をするから困る。そんなに自信持ってオススメしてきたこととは知らなかった。

「ごめん、ウソ。おいしいと思う」

「ウソかー。君のウソはよく分らないよ」

「どゆこと？」

「だって、ホントのことも冗談っぽく言うじゃん」

霧囲気からマジメの香りが漂ってくるが、この流れは好きじゃない。日も沈もうとしていて、夕方の始まりということもそっぴい霧囲気にさせる理由なのかもしれない。

「それはミミが俺のこと信じてないからだよ」

「でもさっきだってウソ吐いたし」

「そりゃー、今日はエイプリル fools だし」

「あの時だって……」

ミミは自分で言っただけで驚いていた。反省するように黙りこく

「あの時って、俺がフラれた時か！」
自虐的にからかったみた。

「だってあれは……」

「冗談で俺が告白すると思う？」

「そう思ったもん」

中学3年の頃だったか、ミミに冗談っぽく告白してみたことがある。下校途中、駄菓子子の曲がり角のところで「好き」って言わないで、「付き合って」だけ言うそんな告白。

「ちょうど、あんな感じにコクる映画あったじゃん。自転車に乗って土手で、夕焼けで『俺たち、付き合わね？』って言う奴」

「あ、知ってる。なんだっけ……。……じゃなくて、それを真似たの!？」

「うん」

「駄菓子屋の前でけっこう街中だったじゃん！」

「駄菓子屋っていう雰囲気とか最高だし、記憶に残るだろ？」

「分からないよ。雰囲気オタめ」

「雰囲気以外もオタだし！」

「ああもう話がこじれる……」

それこそ俺の苦し紛れの話題回避術だが、ミミは古い仲なので通用しない。

「ところで、どうしてエイプリルフルに俺を？」

「なんとなく。それと、東京に行っちゃうんでしょ」

「残念。浪人ですよ。ちょうど四月一日の今日を以て浪人です」

「あら。ホント、なんで呼んだんだろ？」

「俺に未練でもあるのかね？」

わずかではあるが、肩を震わせたので俺は容易く悟ることが出来た。

ミミはボトルの半分くらいまで減った麦茶をゴクゴクと飲み干して穏やかに息を吐く。そして吐いた分だけオレンジ色の空気を吸う。
「未練なんて、そっちがするんじゃないの？」

攻撃的な言葉だけどミミ独特のイタズラ好きなトーンが交じる。

「未練たらたらだよ。人生初フラれ」

「えっ！ そうだったの？」

「あの夜、枕元は涙で濡れたよ」

「それはごめん……」

「じゃあさ、」

たぶん俺はエイプリルフルはどんなにウソを吐いても許される日だとは思っていない。

「付き合ってよ」

エイプリルフルはどんなにホントを言っても信じてもらえない日だっと思う。言葉になんて重さはないけど、言葉を信じれば信じるほど重いとを感じる。

「ホントに？」

信じられない言葉ほど重くないものはない。

「……ホントホント」

俺はおどける。

「まさかー」

中途半端な笑みを浮かべて話を逸らす。

エイプリルフルは言葉の重さをなくす日だ。

こうしてお互い笑い合っているだけ。

別に傷ついたりしない。

「意外とヘタレ？」

ミミの言葉は的を射ていたように思う。

「ここぞという時にうやむやにするからそんな風に言える。」

「俺みたいなのを四月阿保って言うんでしょ。」

「なにそれ？」

「エイプリルフールに騙された人は四月馬鹿で、騙す人は四月阿保って。確か、ミミに教えてもらったんだよ。」

英語のエイプリルフールは四月一日に騙された人という意味だと教えてもらって、一緒に四月阿保を覚えてもらった。

「教えてっけかー……！ 教えてね、うん、教えて！」
すると腹を抱えて笑い出した。

まさか。

「ウソなのかコレ……」

騙されたと気付いた時にすぐさま冷静さが心を支配して居づらい気持ちにさせられる。

夕暮れ時に大爆笑する女の子が俺の隣に座っていた。

ひとしきり笑い終えて俺に向け変えり、

「ホントホント。マジで」

また吹き出していた。

マジでウソだと俺は確信する。

「このウソ、3年以上信じてたよ」

一部友人関係では実在していることにもなっている事態だ。

俺はほとんど入っていないボトルを手の中で遊ばせ、ミミは空っぽのボトルで太ももを叩きながら笑いを抑えていた。

「はぁー、笑った笑った。ホント、呼んでよかったよ」

そろそろお開きのようだ。

笑い涙が夕日に光る。

やっぱり馬鹿そうな顔していた。

「よからぬことを考えていたようだけど、まあいいや。帰るし」
家の方向が真逆だからここで別れだ。

俺は手近にあったゴミ箱にボトルを捨てる。

「俺も早く帰って、今日一番の大嘘を恥じる儀式を行う」

「じゃあ、私も今日一番の大嘘を吐かないとね」

空ポトルをダストシュートしてコンビニの裏手にある道路へ身軽なミミはヒョイと移動する。

「言ってみるよ」

距離が開いたので大きめの声を出して挑発してみた。

ミミはメガホン代わりに片手を口に当てて、大きめの声で返そうとする。

「三度目の正直、期待してるよ！」

そう言い放ち、ミミは手を振る。山間に沈む夕日をバックに腕がゆらゆらと動いていた。

俺も手を振り返し、ミミの後ろ姿を見送った。

自転車にまたがりながら、言葉の意味を探る。

期待していることがウソなのかもしれないし、大嘘を吐くという発言そのものがウソなのかもしれない。三度目の正直ってのは……なるほど。

顔が熱くなったのは夕日のせいだ。

ウソかホントか分からない。

けれど、言葉は信じれば重みを持つ。

俺はその言葉を信じてみようと考えながら帰路へ立った。

(後書き)

エイプリルフル楽しかった。

私も何か便乗したかったです。

ニヤニヤしたらあなたの負けですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1322s/>

3年目の正直

2011年4月2日01時40分発行